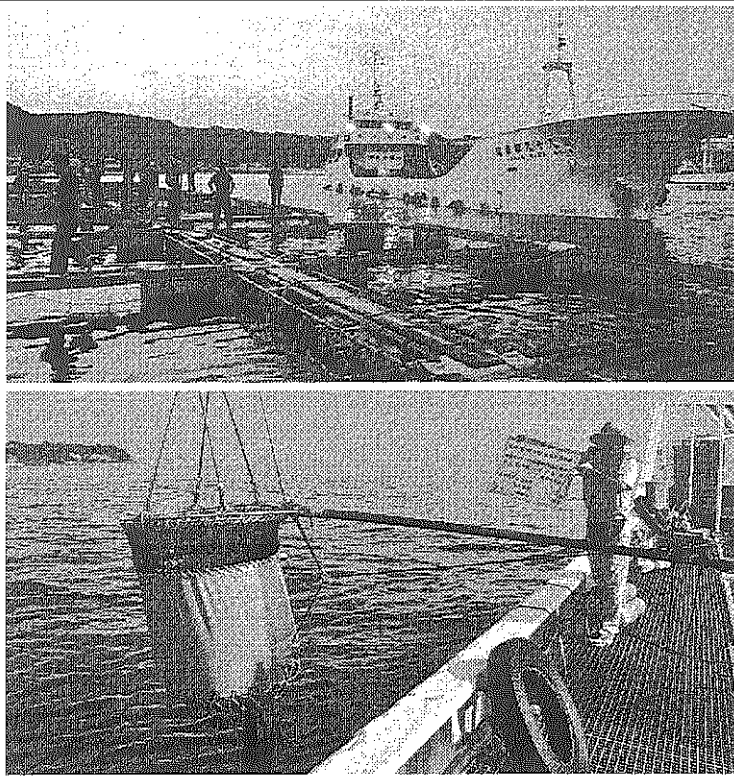


つり環境ビジョン調査型マダイ放流を今年も実施

東京湾口など20万尾

日本釣用品工業会
神奈川県栽培漁業協会

稚魚を計測して放流を



小網代湾の海上筏から活魚船で搬送、東京湾口で放流する

(一社)日本釣用品工業会(島野容三会長)と(公財)日本釣振興会(高宮俊諦会長)は今年も「つり環境ビジョン」として、水中清掃、釣場開放など優先3事業を展開しているが、そのうち

今年度のマダイ調査型放流も昨年と同様、三浦市城ヶ島にある(公財)神奈川県栽培漁業協会に事業委託しており、今回も稚魚の中間育成、計測作業から放流に至るまでつり環境ビジョン委員会が立ち会った。

今年度のマダイ稚魚は、4月21日、22日、御前崎市の静岡県温水利用研究センターより受精卵を仕入れ、同栽培漁業協会・魚類飼育棟内の円形水槽で孵化して飼育、その後6月4日、5日に小網代湾の中間育成施設・海上筏に稚魚を移送して育成していた。そして、7月19日、その海上筏にて同協会の職員による目視でのカウント作業を行い、

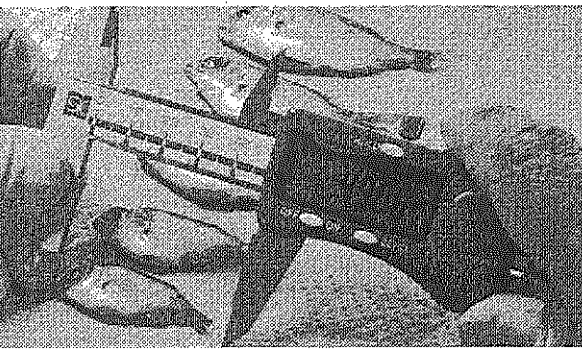
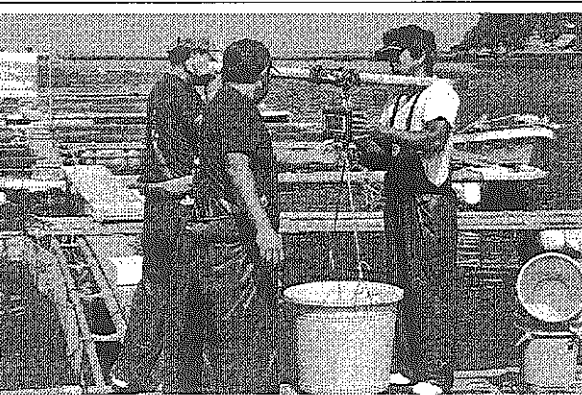
計測作業をした。その結果、サンプル100尾の平均値は全長63・6ミリ、体重4・9gで鼻孔隔壁欠損率は100%ということだった。

そして7月30日に放流作業を実施。夜明け頃、小網代湾にある海上筏に

つり環境ビジョンとして、横須賀東部沖に10万尾、金沢沖に5万尾で、それら3カ所の合計で約20万尾の放流作業を終了した。

放流する前にマダイ稚魚の計測作業を実施

詳細については、つり環境ビジョン事務局へ。



渡り、生簀の防鳥ネットを外し、空が明るくなる頃、200トンの活魚運搬船が到着し、海上筏に横着け。クレーンで下部が開閉式になっている特製のタモ網で水ごと稚魚をすくって活魚船の生簀に移し入れた。それから各所を回って放流。船上の生簀から水ごとタモ網ですくい、クレーンで海上に次々放流した。なお、